

【論文】

主婦と近代的個人

——投稿誌『わいふ』における主婦論争の分析——

池松 玲子*

戦後日本社会では、第二波フェミニズムにおける主婦を問題として問うという流れの中で、家族の中に埋没していた女性たちが近代的個人としての自己に目覚めていくプロセスがあった。主婦であることの意味をめぐる多様なメディアでの積極的な議論があり、そうした議論は社会的に注目され女性たちに影響を与えてもきた。本稿では識者等ではなく主婦自身の主張で構成される投稿誌『わいふ』の主婦論争に着目し、主婦という生き方と近代的個人としての自己をめぐる何が語られたかを明らかにすると共に、こうした論争を可能にしたメディアとしての同誌について考察した。

この主婦論争の焦点は、主婦であるために従属的な存在となる女性が近代的個人として自立できるかどうかだった。論争では自立の多様な側面への主張は論点とはならず、主婦は「稼いでいない＝養われる＝依存者」という理解が支配的になっていった。そのため議論は主婦が働く／働かないという点に集中し、近代的個人としての自立は経済的自立として語られた。その際に同誌編集者は主婦の現状に共感しながらも一定の方向へ議論を誘導し、その方向に沿って読者に生き方を考えるよう求めていた。同時にどのような主張も全否定せず考えることを促すという誌上コミュニケーションのあり方がこうした議論を可能にしていた。『わいふ』誌の規模は大きくはないが、この時代の社会を変える重要な動きの一翼を担ったとはいえるだろう。

キーワード：主婦、近代的個人、雑誌『わいふ』

1 はじめに

1-1 目的

本稿では、主婦の投稿誌『わいふ / wife』¹⁾における「主婦論争」を、戦後の女性たちにみられた意識変革のプロセスを支えた要因のひとつとして位置づけ、同誌上では主婦という生き方と近代的個人としての自己をめぐる何が語られたのかを明らかにすると共に、そうした議論を可能にした同誌のメディア性について考察することを目的とする。

戦後日本社会では、60年代後半に始まった第二波フェミニズムにおける主婦を問題として問うという流れの中で、それまで家族の中に埋没していた女性たちが近代的個人としての自己に目覚めていくプロセスがあった。こうしたプロセスを支えたのは当の第二波フェミニズムの蓋然的な影響だけではなく、より実際的な要因が複数あったと考えられる。そのひとつがメディア上の言説であり、中でも当時の女性雑誌やフェミニズムに立脚したミニコミ誌等の女性向けメディア

* 本学大学院博士後期課程 人間科学研究科生涯人間科学専攻

が注目される²⁾。本稿でとり上げるのはそうしたメディア上の「主婦論争」である。女性を中心に位置づけ女性の生き方を論じる積極的な女性論である主婦論争は、一方で対峙意識を喚起し主婦と呼ばれる女性たちが生き方に疑問をもつ契機となりうるからである。1950年代から現在までに幾度かマスメディア上の主婦論争があり、それぞれが社会的に注目を集め主婦を問うべき存在と認識するよう女性たちに迫った。しかし第二波フェミニズムが起こった時期と重なる50年代から70年代にかけてのマスメディアの主婦論争では、議論の多くは識者や研究者による観念的なもので、実際的主婦にとって当事者意識が持てない議論だったという面がある。

そこで本稿では1963年創刊の投稿誌『わいふ / wife』における主婦論争に着目した。同誌は主婦のための会員制の投稿誌として1963年に創刊され、3人の編集長の交代を経て現在まで50年以上発行され続けている。同誌には原則として投稿を修正することなく掲載するという編集方針があるため、投稿者である主婦の現実を反映した主張にアクセス可能である。同誌には編集長の交代を機に紙面構成や編集方針の変化がみられ、それにより第1期(1963～1975年)、第2期(1976～2006年)、第3期(2006～現在)と区分可能であり、本稿では、第2期『わいふ』における主婦論争を取り上げる。第2期は30年という長期にわたり、会員は全国に広く存在し、その数も最多³⁾だったので活発な議論がみられるからだ。第2期『わいふ』の誌面から抽出した数度的主婦論争のうち、ここでは最初の論争をとりあげ分析する。1977年から1978年に起こったこの論争は、すでに第二派フェミニズムの影響が及んでいると考えられる時期であり、また1955年から1972年の三次にわたる既存の主婦論争を受けて論争が展開しているので比較検討が可能だからである。

1-2 先行研究の検討

女性の「近代人」としての自立と家族をめぐる金井(2011)は、戦後社会における伝統的家族から近代家族への移行が「伝統的なもののうえに新しいものがすっぽりとかぶさる形」で「いわゆる戦後民主主義の二重構造として」進行したと述べている(金井2011: 60)。このように伝統的意識が残存する社会で、女性たちは近代的個人として自立できないまま高度経済成長の中で専業主婦として生きることになり、それもつかの間「女性の『近代人』としての自立要求に端緒を持つフェミニズム」(同: 39)により自立を迫られる事態となる。

しかし、近代人として自立せよと迫られても、そもそも「個人主義」、「業績主義」、「公的生活領域と私的生活領域の区別」といった近代的価値観とは異質なジェンダー役割としての主婦役割を女性に割り当てたのは近代社会そのものである(江原1995: 147-54)。その中で主婦は近代的個人としての生き方を追求しつつも近代の諸価値と矛盾する特徴を備えた主婦として生きざるを得ない。そのため、実際には近代社会の産物であるにも関わらず主婦は前近代的な存在と見えてしまい、そこから主婦という社会的依存についての否定的評価が生じる(国広2001: 30)。近代社会の要請によって引き受けたはずの主婦役割であるにも関わらず、近代的個人として自立できないばかりか依存的な存在としてネガティブな評価をうけるという捻じれた状況下で、主婦と呼ばれる女性たちは葛藤を抱えることになる。

そうした主婦に対し、第二派フェミニズムに先立って近代人として自立せよと論じたのが、『婦人公論』や『朝日ジャーナル』等のマスメディアにおける「主婦論争」(1955～1972年)である。

その契機となった「主婦という第二職業論」(石垣綾子 1955年『婦人公論』)は「主婦の心はふやけている」(上野編 1982a: 9), 「(主婦は)鈍い頭脳へと退化してゆく危険が多い」(同)などと挑発的な論調で主婦に自立を迫った。この論争は上野(1982)が「解説 主婦論争を讀解する」(上野編 1982b: 246-74)で一連の流れと内容をクリアに分析している。しかしこうした分析だけではなく論争に組み入れられた多くの論文について「主婦論争は、どこか宙に浮いた、観念的な理屈の応酬に終わった感をまぬがれなかった」(貴島 1968: 231), あるいは「特に一般の専業主婦にとってはピンとこない無縁の論争といったままで終わったことはいなめない」(駒野 1982: 240)という指摘がある。主婦論争でありながら当事者である主婦を置き去りにした論争という矛盾があった。

これに対して本稿でとりあげる『わいふ』の主婦論争(1977～1978年)は投稿誌という性格上、また同誌の編集方針によって、主婦のリアリティに根ざした主張を読み取ることができる。第二派フェミニズムの影響が及び始めていたこの時期に、同誌の主婦たちは論争を通して主婦をどう論じ、何が重要と主張したのかについて投稿の言説を分析し、主婦という生き方と近代的個人としての自己をめぐる何が語られたのかを明らかにする。同時にそうした分析を通して同誌のメディア性についても考察する。

1-3 分析方法

第2期『わいふ』の主婦論争は以下のように抽出した。まず同誌の主婦論争を「契機となった主婦ライフスタイルに関する投稿への批判・支持を示す投稿が複数あり、それらに対する再反論が存在する一連の議論」と定義した。その上で活発な意見交換がみられる「コーナー」を確認し、そこで言及されていた投稿をたどっていき論争を特定した。本稿で対象としたのは、①「おしゃべり」、②「ティーチイン」という「コーナー」に掲載された投稿である⁴⁾。このような手順で『わいふ』の主婦論争は6件抽出された(表1)。表1から分かるのは、類似の論点による論争が繰り返されていることである。本稿では連続性がみられるこれらの論争の起点となった論争(1)をとりあげ投稿の言説を質的に分析していく。

表1 既存の主婦論争と『わいふ』の主婦論争一覧

期間	論争と概括的な論点
1955年-1959年	第一次主婦論争 主婦の職場進出
1960年-1961年	第二次主婦論争 家事労働
1972年	第三次主婦論争 主婦の立場
1977年-1978年	『わいふ』主婦論争(1) 主婦の経済力
1983年	『わいふ』主婦論争(2) 働く/働かない
1990年-1991年	『わいふ』主婦論争(3) 専業主婦という生き方
1995年-1996年	『わいふ』主婦論争(4) 三歳児神話と働く/働かない
1995年-1996年	『わいふ』主婦論争(5) 専業主婦という生き方
2003年-2005年	『わいふ』主婦論争(6) 子どもをめぐる女性の生き方

2 論争の概要と投稿の相互関係

本稿で対象とした論争は「主婦の長電話」(a1:1977年146号:8-10)という投稿が発端となったため、これを便宜上「主婦の長電話」論争と名付けた。まず契機となった投稿と反論や支持を示した投稿に加えて、『わいふ』編集部による議論活性化のための問いかけ、あるいは特定の内容の投稿を促す呼びかけ等を「介入」とし、これらも抜き出し時系列に示した(表2)。本稿では投稿者をアルファベット大文字で、投稿を同じアルファベット小文字で表示し、投稿者に複数の投稿がある場合は小文字に数字を併記している。

表2 「主婦の長電話」論争の投稿一覧

1977年	146号	a1「主婦の長電話」		
	147号	b「読書感想を捨てよう」	o1「働きたい衝動を反省して」	【編集部の介入1】
	148号	d1「養っているのはどっち？」	o「何故めくじらを立てるのか」	a2「私の言いたかったこと」
				【編集部の介入2】
	149号	f「心を外に向けたらいい」	d2「専業主婦もつらい」	g「女の自覚」
		田中真美子の介入 「やりたいことをやればよい？」		【編集部の介入3】
	150号	h「がけっふちの主婦論」	i「思考の幅を広げよう！」	j「死肉に在る自由」
k「“主婦専”は専専ではない」		l「主婦の価値に自信」	m「『わいふ』と私」	
1978年	151号	e2「嫉妬」	n「主婦とは半人前のこと」	a3「家事の価値」
		o「働きたくとも」	p「いまはまだ母親」	q「しっかり見つめることから」
	152号	公開ティーチイン「主婦といわれる私たち」	r「“主婦”というハンデについて」	
	153号	継続ティーチイン「主婦と呼ばれる私たち」		

注) 投稿数合計22件。投稿者はアルファベット大文字で、投稿は小文字で示す。同じ投稿者が複数の投稿をしているケースでは数字をつけて示している。例えば、投稿者Aの投稿はa1、a2、a3、の3件である。

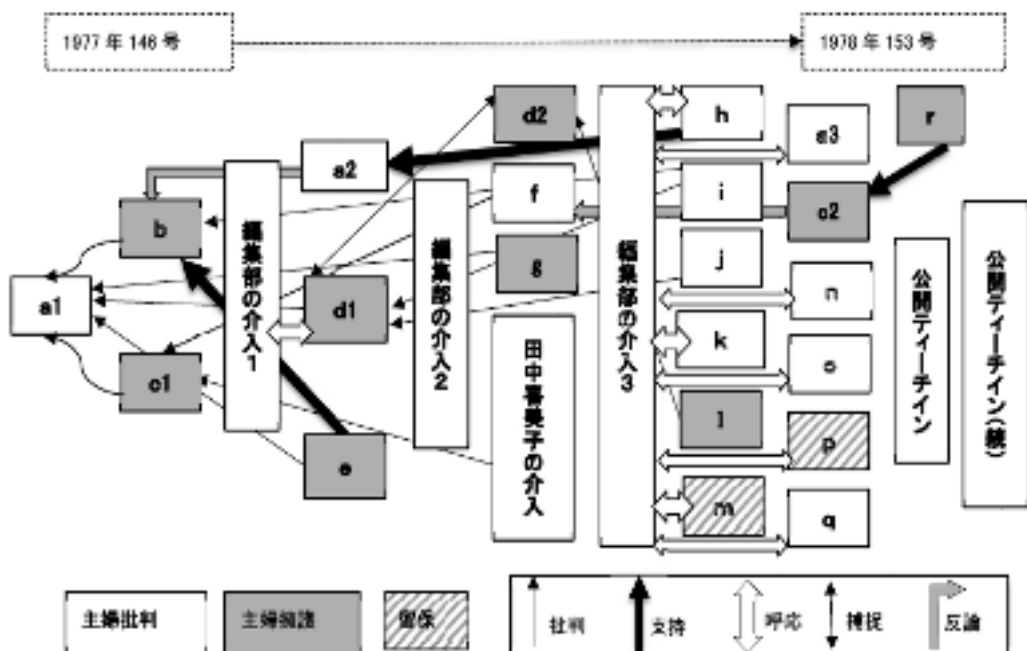
続いて、論争の契機となった投稿 a1「主婦の長電話」の概要を示す。同投稿では、毎日新聞家庭欄に掲載された記事「家庭 暮らしと経済」(毎日新聞 1977年4月2日朝刊)を読んだAが、その内容を手がかりに主婦の経済力の必要性について述べている。当該記事は、日本電信電話公社(日本電信電話株式会社の前身)が主婦700人を対象に実施した調査結果から「主婦の家庭内電話利用度は家庭内でトップ」であるとし、主婦は「用がなくてもおしゃべりを楽しむものらしい」とコメントしている。新聞記事自体は特に主婦を責める論調ではないが、Aは「長電話」という言葉そのものが女性を連想させ非難がましいひびきがあるという。そこで「女(=主婦)の長電話」言説によって非難されないためにも、主婦はいくらかでも経済力をつけ、せめて電話料金を自ら負担すれば「女の長電話」と非難されることも少なくなるだろうと述べている。

さらにAは「主婦が家庭の管理者としての役割を担う以上、完全な経済的独立は不要」と考えるものの、「自分のお金」を持たない主婦は「自分自身のための出費を躊躇し、自らの欲求を抑制することが習慣になってしまい、意欲というものを持たない人間になる」と懸念する。しかも

「主婦は家庭の中で閉塞状況にあるために視野が狭くなるだけでなく、考え方が自己中心になってしまう」と危惧してもある。こうした状況下で職場進出する可能性も乏しい現在、「主婦の小遣い稼ぎ」程度の収入でも主婦にとっては重要であり、それをもって「女性解放が達成される」とは思わないが手がかかりにはなると思う」と結んでいる。このように投稿 a1「主婦の長電話」は主婦の経済力についての考察であり、①「主婦の長電話」言説は主婦を非難している、②経済力をもたない主婦は社会性に欠けた人間になる恐れがある、③主婦の経済力は個人的にも社会的にも重要である、という3点が強調されている。

以上が論争のきっかけとなった投稿の内容で、この投稿に対する賛否・留保の投稿の相互関係を図示したのが図1である。図1ではa1を起点とし左から右に向かう時系列の全体的な流れの中に、先に表2として示した全ての投稿等を、その相互関係を示しつつ配置した。この図表からは次のようなことがみて取れる。論争開始当初は「主婦批判」派の投稿 a1 に対して「主婦擁護」派の投稿が優勢だった。しかし編集部介入のたびに「主婦批判」や「留保」の投稿が出現して「主婦擁護」派の投稿は少数派になっていく。なぜ「主婦擁護」派は少数派になっていったのだろうか。次節からは図1の内容をいくつかの論点から整理し時系列に記述していく。

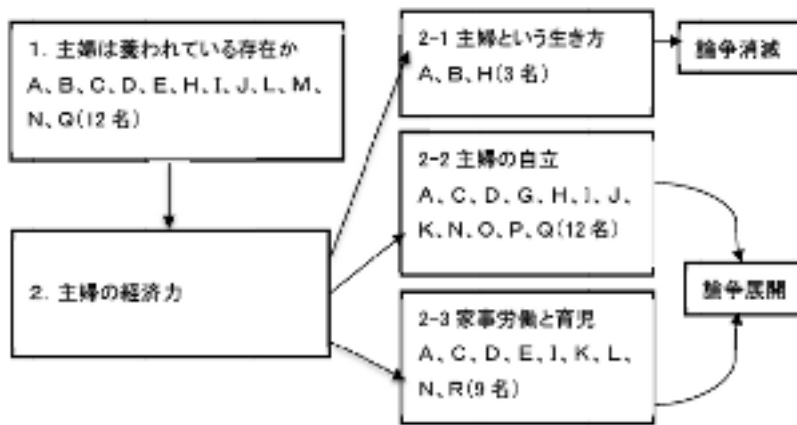
図1 「主婦の長電話」論争における投稿の相互関係



3 主婦は養われている存在か

「主婦の長電話」論争の論点とその推移を図示すると図2のようになる。つまり、この論争の中で、主婦当事者は主婦についてどう論じたのかということ、図表の枠内の4点をめぐるものだったということだ。まず「1. 主婦は養われている存在か」という議論が、「2. 主婦の経済力」という議論につながっていった。後者はさらに「2-1 主婦という生き方」、「2-2 主婦の自立」、「2-3 家事労働と育児」をめぐる議論に分岐したが、「2-1 主婦という生き方」をめぐる議論は途中消滅し、「2-2 主婦の自立」と「2-3 家事労働と育児」をめぐる論争は相互に関連しつつ展開していった。以下では論点ごとに論争の流れを整理し、それぞれの流れにそって内容を分析する。

図2 「主婦の長電話」論争における論点の推移と言及している投稿者数



注) 四角内のアルファベットは大文字で投稿者を表している。扱った投稿では論点が重複しているので図表1で示した投稿総数よりこの総数は多くなっている。

投稿 a1 を「主婦批判」とすると、次号に掲載された b「被害妄想を捨てよう」と c1「働きたい衝動を反省して」の2投稿は a1 を批判する「主婦擁護」である。Bは a1 の「主婦の長電話」言説が主婦を非難しているという意見に対して、それは緊急時に迷惑だという程度のもので『主婦の長電話』という言葉に非難がましい響きを感じるのは被害妄想ではないか」と以下のように批判した。

自分が養われているという意識が底にあるから、この様な被害者意識をもたらすのだと思うが。(中略) 養われているという、意外に深い思い込み、又養っているという思い込み、どうにかならないものだろうか。急激に変えられるような種類のものではないので、悔しい。(b:1997年147号:13)

他方Cは c1「働きたい衝動を反省して」で、保育園を利用して働いてみたものの母親の都合を考慮しているとはいいがたい保育の状況に、母親が働くことは不可能に近いと考え次のように

続けている。

家庭を維持する為には誰か専従者が必要なのであるから、家庭に閉じこもって家事に専念していることを卑屈に感じることはない。(中略) 子供に手がかからなくなったその分を家の中をよりきれいにし、ホームメイキングに徹し、趣味を持ち、そうすることに満足して十分家庭で時を費やしている人は無理に外に向く必要はない。(c1: 同: 14)

こうした a1 への批判, 特に b の主張が引き金となって, a1 の「主婦の長電話」言説は「主婦を非難している／いない」という議論が「主婦は養われている存在だ／そうではない」という議論に置き換わった。

まず「主婦は養われているわけではない」という立場から D は、「自分の選んだ人生に自信と責任をもつべきだ」と主張した上で「おまえを養っているんだぞ, なんていう御亭主がいたら, 今晚の夕食はおあずけですっていっておやりなさい」(d1:1997年 148号: 9) と述べている。同様に E は「主婦が長電話するのは自分で稼いだお金ではないからだ, などと云われると, その貧しさに怒りよりむしろ憐みを感じてしまう」(e: 同: 10) と反発している。また L も『「専業主婦をめぐる論争」の中で『専業主婦は養われていることを自覚すべきだ』というのには驚きました。(中略) 我が家ではサラリーの半分は女房の働きと言ったり言われたりしているこのごろです」(l:1977年 150号: 52) と主張している。

こうした「養われているわけではない」という主張に対しては再反論があった。例えば, 主婦は「無職よろずプロ並みの留守番」であって, 「(家事が) 尊い仕事の収入に換算すればの, 話ばかりでその実, 子供と同じで扶養されているとしかみなされない」(j:1978年 150号: 10), あるいは「主婦というのは, 人間として半人前で, 子供と好対照だ」(n:1978年 151号: 9) 等というものだった。さらに「主婦が自分では夫と対等のつもりでいても, 養われる代償として家事とセックスのサービスをする地位におかれる危険は大きいと思う」(h:1978年 150号: 7) というセクシュアリティに踏み込んだ主張もあった。

このように, 論争にはまず「主婦批判」対「主婦擁護」の二項対立の構図がみられたが, 中には主婦内の差異に注意を喚起し, あるいは「養われている弱い立場」への対処方法を提示する「留保」論もみられた。主婦内の差異としては, 「主婦が養われているという被害妄想」をめぐる意見が対立するのは個々の主婦の状況の差によるものだとして「今晚の夕食はおあずけです」等と実際に言おうものなら「たぶんわが家では拳のあられが降るだろう」(i:1978年 150号: 9) という d1 への批判がある。また対処方法としては, 専業主婦は「働かなくても食べていける特権階級」だが「養われていることを自覚すべき」弱い存在なので「主婦のノウハウ」のような家事の中身を「売れる」くらいのプロになるべきだという主張だった (d2:1977年 149号: 11-12)。

ここで改めて「主婦は養われている存在だ／そうではない」という議論の発端となった B の主張の中心である「被害妄想」と「被害者意識」について検討する必要がある。「主婦の長電話」言説で主婦は非難されているという A に対し「非難されている」と感じるのは「被害妄想」だと B は主張した。被害妄想とは他人から危害を加えられているという妄想(根拠のない主観的認識)であるとしたら, A が根拠なく加えられていると認識している危害とは主婦に対する「他者からの非難」

ということになる。重ねてBは「自分が養われているという意識が底にあるから、このような被害者意識をもたらすのだ」という。つまり「養われている」ことは非難されて当然のことなので、「養われている」意識を持つことでAに「他者からの非難」を受けているという被害者意識が生まれるというわけだ。「養われている」意識をもつから問題なのであって、主婦は養われているわけではなく、「養われているという思いこみ」があるだけだとBは主張し、これは「どうにかならないものだろうか」と嘆く。

c1の主張にある「家事に専念していることを卑屈に感じることはない」という「卑屈」も同様である。家事専従となれば自らは無収入で夫に「養われている」と思い「卑屈」になるかもしれないが、家庭には家事専従者が必要なので自分を卑しめる必要はないと説いている。つまりCにとっても「養われる」ことは卑屈になってしかるべきことなのである。このように両者には「養われる」ことが好ましいことではないという共通認識があり、その上で主婦は「養われているわけではない」ので非難には値しないと主張している。そしてこの主張は家事・育児を全面的に担っていることを根拠として可能になっている。

これらに対して、主婦は「子どもと同じで扶養されている」、「養われていることを自覚すべきだ」等の事実として「養われている」とする反論は、主婦が担う家事・育児を議論の外におき経済力のない主婦という現実からのみ直接的になされた。そのため「専業主婦が女性の社会進出を妨害しているという論理には疑問を感じていた。主婦が長電話をするのは自分で稼いだお金ではないからだ等と聞くと憐れみを覚える」(e1)といった「主婦擁護」や、主婦が働くことを想定していない社会のしくみを主張することで「養われている」ことを正当化する反論等が繰り返された。そうはいつても「主婦批判」派も「主婦擁護」派同様多くは夫の扶養下にある。そのためこの対立軸では、例えば「私たちはまず主婦業のもつ不合理さ、弱点をごまかさずにしっかり認識すること」(q:1978年151号:14)が重要だという「養われている」ことをまずは自覚すべきだという主張がみられた。注目すべきは、主婦は「養われている存在か」という論点が論争に通底していたことである。

4 主婦の経済力をめぐる議論

4-1 主婦という生き方

主婦の経済力をめぐる議論のひとつは主婦という生き方についてのものだった。経済力をもたない主婦は社会性に欠けた意欲のない人間になる恐れがあると指摘し、例え「小遣いかせぎ」程度でも経済力はあった方がよいと主張したAに対して、Bは「養っている／養われている」という思い込みを脱しない限り「いくら主婦が小遣い稼ぎをしたところで、(中略)それこそ、女性差別を助長することになるのではなからうか」(b:1997年147号:13)と批判した。これに対してAはa2「私の言いたかったこと」で、主婦の日常的経験を否定するつもりはなく「主婦としての生き方」の他に「個人としての生き方」を考えたいとして以下のように反論している。

自分が好奇心とか意欲を持つことに気づかないと、他の女性の持つそれを理解できず、結局「女の足を女がひっぱる」ことになるだろうと思う。(中略)「小遣いかせぎ」によっ

てささやかなる「個人的生活」の資金にしようというのもやり方の一つで、中途半端なだけにわりと多くの人にやりやすいと思って書いた。(a2:1977年148号:12)

この主張を全面的に支持したのがHである。「Aさんの文、個人の精神生活と経済力の関係をよく見抜いていらっしゃる」(h:1978年150号:7)と名指しで賛意を表し「孤立し、くり返し仕事」に埋没していると「自分が何をしたいのか」を見失い「見失ったことさえ自覚できないほど心がマヒする」と述べている。

このように主婦の経済力は単に「主婦の収入」というだけではなく、個人としての女性の生き方を担保するものとして重要だという主張がなされた。そこには主婦であるだけでなく、近代的個人としての生き方を考えるという可能性が含意されていたが、その後これに対する意見はみられずHの投稿で終息している。主婦という生き方に生じる不安や葛藤を述べる投稿は少なくないが、「主婦としての生き方」だけではなく「近代的個人としての生き方」を考えようとするAやHのような主張は他にみられず単独の論点とはならなかった。

4-2 主婦の自立

主婦という生き方議論の一方で、主婦の経済力が主婦個人にとっても社会を変え得るという意味でも重要であるというa1の主張をめぐって、議論は「主婦の自立」と「家事労働と育児」という2つの軸で展開した。「主婦の自立」軸では以下のような議論がみられた。

まず、経済的自立の重要性を主張する投稿には、例えば「ボランティアで福祉の一角を支え、PTAの仕事をし(中略)務めてきても夫なきは無職無収入のお荷物になる」(j:1978年150号)、『「イザ別れる時困るのは女だ、男は困りゃしない」の発言を否定できる主婦の人は一人とていないのではないだろうか」(k:1978年150号:12)、「家庭婦人の誰もが内心ひそかに恐れていることは、夫一人に依存して生活する外ない妻の不安定さだ」(q:1978年151号:13)等と、夫の経済力に依存する主婦の不安を指摘した上で「働くこと」を強調する主張があった。

他方、主婦の経済的自立を視点を変えて考えることも必要ではないかとc2では以下のような意見があった。

外に出て働くことだけを即女性の自立と考えるのではなく、いくらかでも家庭生活を自給自足の形で運用するなどによっても主婦も消費的人間から生産的人間になり得るのだという方向で主婦の自立を考えることも必要なのではないか。(c2:1978年151号:8)

さらに、自立を経済ではなく異なった側面からとらえようとする意見も表明された。

「女の自立は経済的自立から」だけではなく精神的な自立こそ真の自立ではないかと思う。(中略)何事にも積極的に、自分で考え、自分で行動できる力を貯え、自信をもって日々を送りたいものである。(g:1977年149号:13)

Gが「経済的自立からだけではなく」と断っているにも関わらず、これに対してHが以下のよ

うに批判した。

経済なんかとは関係なく精神は自立できるという人々の「自立」の中味が気にかかる。どうも自分一人がしっかりしようという精神修養にかたむきがちで、まかりまちがえば昔ながらの良妻賢母になりそうな危なさを感じてしまって。(h:1978年150号:7)

Hは自立の精神的側面といった考え方に危うさを指摘している。

こうした「自立＝働く」論や「自立の視点を変えてみる」といった主張に対して、実際に働こうとした／働いてみた主婦からは、経済的自立の重要性を認識しつつも現状では主婦の就業は困難だという体験談が現れた。働こうと資格をとったものの再就職には「年齢制限」があり、面接では「子どもをみってくれる人はいるのか」と聞かれ、「今働き始めないと、もう一生働けないのだろうかと不安ばかり先行する」(o:1978年151号:11)というものだった。さらに家事労働を完璧にやりとげた上に責任が伴う「稼ぎに出る」ことなど能力的に困難だとして、「短い期間の試し働きで専業主婦は相当の覚悟を決めて脱皮飛躍をはからなくては逆に多くの問題を背負うことになることを思い知らされた」(p:1978年151号:13)と、挫折の経験を述べた投稿もあった。

こうした流れの中で、「働きたい人が働けばよい。家にいたければいればよい」(c1:1977年147号:13)と「働く／働かない」は個人の選択であって議論する必要があるのかという意見が現れた。これに対しては田中喜美子編集長が、「やりたいこと」が実行可能なのは条件的に恵まれた人々であって、実際にはできない人の方が多いのに「やりたいことをやればよい」という意見には意味があるだろうかと問いかけ、次のように続けた。

やりたいことをやっている人は、どうしてそれができたのかという事を、やれない人は、何故できないのか、そうして、どうしたらやれる方向にもっていけるのかということ、社会全体の構造と一人一人のケースの両方から細かく考え、見つめていく、それが大切だと思うのです。(田中喜美子:1977年149号:14)

「働く／働かない」は選択の自由という主張に対し、田中はこのようにより深く考えるように促す意見を投稿という体裁で掲載した。田中の投稿のせい、主婦の自立については主婦個人の視点からだけでなく社会に位置づけてみることも重要だという意見が現れた。例えば主婦の就業の困難には、就職先がないこと以外にも「家を空ける」ことの困難な状況があるとして、「生活方法の自由な選択のためには、良い託児所や労働条件と共に、ゴミ収集や小包み配達等のシステムについて、家に留守番が居ることが前提になっている社会のあり方にも目を向け」(j:1978年150号:10)なければならないといった主張だった。

さらに長期にわたって主婦問題が論じられ「意見は出つくした観があるにもかかわらず一向に解決しない」のは、各々が自らの立場で個人的なこととして考えるからだと、Qは次のような見方を示している。

男達が作っている現代社会は専業主婦によって支えられているといっても過言ではあり

ません。(中略) もう一つ都合のよいことは、女性の労働力を非常に安く使うことができることでしょう。(q:1978年151号:13-14)

そして働く女性たちの家事負担の重さに言及し「家庭婦人と職業婦人は一見無関係のようですが、たどってゆくと性差別という同じ根にゆきつくのです」(q:1978年151号:14)とフェミニズムの言説に親和的な考えを述べている。

以上のように、「主婦批判」派は「自立＝経済力＝働く」論を肯定したのに対して、「主婦擁護」派は働くことばかりを重視する点に疑問を呈し、その一方で働きたくても働けないという現実的な状況を訴える主張や、社会的な問題として捉えようとする「留保」という構図がみられた。こうした流れの中で「精神的自立」や「自立を経済力以外の視点から考える」といったオルタナティブな主張は論点とはならず、「働けないこと」は個人の努力で解決可能なことばかりではないという認識が示され、総じて可能ならば働いたほうが良いといったレベルで経済的自立が議論された。

4-3 家事労働と育児

主婦の経済力をめぐっては、主婦の自立に関する議論が展開した一方で、家事労働と育児も俎上に上った。c1とd1の主張が家事論争として展開する誘因となった。

まず家事労働を肯定的にとらえる投稿c1では、家庭を維持するには専従者が必要なことから家庭に責任をもつ者としての主婦は堂々とあるべきだと主張された。

他人に家庭をまかせて外に出て働くことも家庭で働くことも、その労働の価値に何ら差はない。ただ他人からお金を受け取って、よい気分になるか、旦那様の給料からそれをへそくるかの違いである。だから給料の一部を家事労働の報酬として悠々と使うようにすればよいのである。(c1:1977年147号:14)

次にd1では、主婦の担う家事は価値を生まない労働とされるが、家事労働そのものは有意義な労働であると以下のように主張されている。

家族のためにおいしい食事を作り、清潔な生活環境を用意してあげるという生活に何のうしろめたさがあるのでしょうか。誰に遠慮することがあるのでしょうか。(中略) たえ無価値のレッテルを貼られたとしても、それを無意味な労働だときめつけることは誰にもできないと思います。(d1:1977年148号:9)

対して家事労働を否定的にとらえる意見としては、例えば「主婦の私にとって、主婦での仕事はさっさと片づけるべき、片手間のもの」(k:1978年150号:12)、また個々人がやるべき家事労働を家族の人数分まとめて一人で引き受けるのが主婦の役割なので「ヒトの分までの後始末が十分に張り合いのある仕事でないのは当たり前のこと」(n:1978年151号:9)等があった。

その一方でAは稿を改めて「家事の価値」について論じ、主婦業を金に換算しようという動き

があることを示して「主婦が月何万か何十万かしらないが、私は経済的自立は他の手段でみつきたいと思う。家事や育児は愛する人のためにただですものだ」(a3:1978年151:10)と主張した。ここでは「主婦批判」派のAが家事・育児を「愛の労働」とし、この価値を損なわないためにも経済力は必要だという新たな視点を打ち出したが、これについての反応はなかった。

このように、家事労働については、「主婦批判」派も「主婦擁護」派も家事が家庭を維持するための不可欠な労働と認めつつも、前者は家事に特段の意味をもたせず、したがって賃労働に肯定的である。その一方で、後者は家事を積極的に肯定して家庭に責任をもつことを重視し、その対価として夫への経済的な依存を当然視している。

次に育児については「主婦専業であることが女の社会進出を妨害している式の論理にはかねがね非常に疑問を感じて」いたというEが以下のように述べている。

もういいのです。お金を一銭でも多く得ることが働くこと、すなわち社会への進出、女性の解放 ETC——と信じる人がいる一方、外へ出ていく母親の陰でどれだけ子どもがいるような形で犠牲になっているか、といい続ける人がいて。だから、これからの女性はかくあるべきだ。なんぞと云って欲しくないのです。(e:1977年148号:10)

加えて賃労働による主婦不在が家庭崩壊につながると危惧する立場からの主張もあった。

主婦が働けるような体制づくりが成されないままに皆が外に飛び出したら日本の家庭は崩壊してしまうのではないか。いくら女性の自立の為とは言っても子供や家事が放りっぱなしにされてよいはずはない。女性の解放を叫ぶのと並行して主婦の自立を妨げている育児、家事をいかにすべきかを考えるべきではないだろうか。(c2:1978年151号:8)

このc2の主張をRが全面的に支持している。

(c2での主張は)現在の主婦の持つ一般的な主婦論ではないだろうかと思っています。私の周囲にはこのような考えの方がほとんどをしめると言っても過言ではないかと思えます。(r:1978年152号:51)

このように、育児はより経済的自立と重ねて取り上げられる傾向があり、主婦が就労すると子どもが犠牲になる、あるいは家庭が崩壊するといった主張が一定の重みをもって語られた。それらに対しては「子供を保育所に預けて共働きをするのは、子供が犠牲になるというなら、夫が急死してあわてて女が一家を背負う悲惨さに比べたら、どちらが不幸か?」(i:1978年150号:9)等の反論はあった。しかし、主婦の経験的現実を元にした主張には一定の説得力があったようで、夫の扶養下で働かなくともすむ主婦にとっては保育施設の不十分な状況や家庭責任を一身に負って働く困難などが働くことへの懐疑につながったと考えられ、Rの投稿がこの論争の最後になった。

5 編集部による介入

以上の論争には田中喜美子編集長の投稿を含めて4度にわたる編集部の「介入」がある。論争に関連する投稿が掲載されたページに枠線に囲まれた編集部からの短いコメント欄があり、これが論争への参加を呼びかけ、あるいは方向づけるような内容だった。そもそも「主婦の長電話」論争が起こった1977年当時には、同誌ではすでに投稿を選別している状況だったので⁵⁾、選別自体に編集部の意向が反映されている可能性は高い。そうした点を念頭に編集部が同誌上の言説空間をどうコントロールしたのかをみていく。

最初の「介入」は、論争の契機となった投稿 a1「主婦の長電話」(146号)が掲載された次号である。コメントは、同誌には「よい問題提起」をする投稿があるが「言いつ放し、書きつ放しに終わり、論争に発展しない」のが惜しいという意見があることを伝え、b「被害妄想を捨てよう」と c1「働きたい衝動を反省して」の投稿をめぐって、会員に積極的な議論参加(投稿)を期待するという内容だった。具体的には以下のようなものである。

(bとc1には) お金を稼がないで家にいる主婦だからといって、劣等感をもつことはない、という点に大きな共通点があると云えるでしょう。主婦の価値?については、いまや千差万別の考えがありますが、お二人のご意見を出発点として、この古くて新しい問題を掘り下げるために皆さまのご寄稿をお待ちしています。(編集部)『わいふ』1977年147号:12)

この「介入」により、次号148号に b・c1 を支持する d1「養っているのはどっち?」、e「何故めくじらを立てるのか」と、bへの反論として a2「私の言いたかったこと」が掲載された。同時に148号には2度目の「介入」があり「前号同様主婦の働きの価値を強調する主張」が多いが、では「主婦の働きが社会的に評価されない現実も、一方には厳然として存在しているのはなぜでしょうか」と問題提起している(『わいふ』1977年148号:12)。

前述のように投稿は編集部によりすでに取捨選択されているとすると、編集部の「主婦の働きの価値を強調する主張が多い」というコメントは掲載された投稿以外にも多くの同タイプの投稿があったことを意味する。つまり、2度にわたり「問題を掘り下げるために」関連投稿を期待するという編集部のコメントがあったにも関わらず、依然として「主婦擁護」の投稿が多かったとみられ、編集部では次のような3度目のコメントを掲載している。

147号から継続ティーチインで、主婦をめぐっての論争をつづけてきましたが、現在までのところ、①主婦は家の中で大切な働きをしているのだから収入を伴わない仕事をしている人間だと軽視するのは間違っている。②主婦は余暇を利用して家事育児だけでなく色々有意義な活動ができるのだから良い身分である。という二種類の論調が圧倒的に多いようです。同じことの繰り返しでは発展性がありませんので今後の継続ティーチインにはこの二種類だけでなく、異なった視点から“主婦とは何か”を掘り下げて下さる投稿を期待しています。(編集部『わいふ』1977年149号:14)

このコメントでは主婦というライフスタイルを肯定する①や②のタイプの投稿ではなく「異なった視点」から、つまり「主婦擁護」以外の投稿を期待すると明言されている。その結果、「介入」に応えた主張が150号から151号に掲載され、その多くは「主婦批判」の投稿だった(図1参照)。

このように編集部の「介入」1と2があって投稿は増えたものの投稿の傾向はさして変化しなかったところへ、明確に主婦ライフスタイルに批判的な主張を求めるという3度目の「介入」の下で全体的な論調は一変したことがみてとれる。「介入」1の文面はニュートラルで「多くの投稿を期待する」という内容である。しかし「介入」2の主婦に対する社会の低評価への言及には①「低評価がやむをえない部分もある」と②「低評価に自覚的であるべきだ」という2つの含意があり、ここでニュートラルな状態から方向転換したとみられ、最後の「介入」3では議論の方向を明示している。こうしたことから、田中をはじめとした編集部の誌面におけるオピニオン形成がみてとれる。

6 考察

6-1 論争では何が語られたのか

「主婦の長電話」論争では、主婦は「養われる存在」か否かが重要なこととして論じられた。自立する近代的個人像を理想とするイデオロギーが維持される中では「養われる存在」つまり「依存的存在」はマイナス評価となる。それを避けるために①「養われる存在」であることを認めて自立に向かう、あるいは②「養われる存在」であることを否定して自尊感情を維持する、という対立する主張があった。いずれの主張でも主婦にとっては「養われる存在」とみなされないことが重要かつセンシティブなこととして論争の言説に読み取れた。

「養われる」ことがネガティブに意識されているため、②の立場をとる「主婦擁護」派が家事を価値ある活動と主張しても、家事が経済的価値を生まない単なる雑用といった言説によって否定されてしまう。また「精神的な自立」や「自立を経済力とする視点をずらす」といったオルタナティブな意見は「夫の経済力に依存する主婦の不安」等を指摘する強い主張の中で共感を得ることができない。同時に自立に含まれていたはずの多様な意味合いが語られることもなく、主婦ではなく近代的個人として生きるとはどういうことかといった根源的な議論も成立しえなかった。こうして「養われる存在」と認めて自立すべきと主張する「主婦批判」派によって主婦の多様な役割がネガティブに語られ脇に追いやられ、議論は「働く／働かない」という論点に集中していった。

このように「稼いでいない＝養われる」存在という主婦理解が、この論争の枠組みを通じて正当なものとして支配的になっていく過程がみられた。詳細にみていくと議論は複雑に入り組んではいるが、全体としては「稼いでいない＝養われる」という意見に焦点が当たり、多様な考えがあったにもかかわらず「稼ぐこと」こそ自立の源泉という見方が共有され、「主婦＝依存者」という特定の理解を前提として議論は展開していった。

もちろん、「稼いでいない」ことと「依存」は異なるものである。したがって「主婦擁護」派による「主婦は稼いでいないが、それは依存ではない」という核心的主張や、主婦役割を担うことは「稼ぐ」ことと同等であり家族に対等な貢献をしているという論理は誤りではない。そもそも

も専業主婦というあり方は、個人レベルでは家族という単位で妻と夫によって役割を分けもつという認識で始まったものだろう。そこには家族の共同性を支えるといった考え方があったはずだ。そうだとすれば家族を支える役割を担いつつ個人として自立する方向性が検討されても矛盾はないが、議論はそうした方向をとらなかった。それはこの論争が高度経済成長後の金銭中心主義の定着した時期に起こったことと無関係ではない。当時の金銭中心主義という時代背景の下では「稼いでいない＝養われる＝依存」という考えは単純に受け止められ、またそうした考えが受け入れられる社会的素地があったということだ。

その一方で、夫の扶養下にある女性たちにとっては、保育施設の不十分な状況や家庭責任を負った上で働く困難等が主婦の経験的現実として語られ「無理に働くことはない」と主張されれば、それには一定の説得力があったと考えられる。したがって議論は、まずは「養われている」ことを自覚すべきだという流れになった。また「働けないこと」は個人の努力だけで解決できるわけではないという主張もあり、論点は「働く／働かない」というよりも、より詳細にみれば「可能ならば働いたほうが良い」といったレベルの経済的自立に向かったとみられる。この論争では、家族のために家庭にあることが当然視されていた主婦と呼ばれる女性たちの近代的個人としての自立は、経済的自立として語られていたことがわかる。同時に、この論争が伝えたのは「養われる存在」という主婦観および経済に特定された自立観だったといえよう。

6-2 メディアとしての『わいふ』

他方メディアとしての『わいふ』誌に注目し、同誌が女性たちの意識変革プロセスをどのように可能にしたのかという点を考えるには、田中喜美子編集長と和田好子副編集長の「介入」を検討する必要がある。両名は自ら主婦というあり方を疑いながら、『わいふ』という自由な言論空間を提供する活動を通して主婦と呼ばれる女性たちを支えてきたフェミニストである（池松2017: 20）。「介入」の内容が示しているように、両名は同誌会員に主婦という生き方を問うこと及びその問いが社会的文脈にあるとの認識をもつことを期待していた。そうした期待から田中らは議論の活性化を促すとともに主婦の経済的自立の必要性を考える方向へと論争をコントロールした。

しかも論争構成をみると、導入部ではどのような主張をも排除せず、フェミニズムの言説や自立した近代的個人像に共感するタイプの主婦ばかりではなく、より広範な「普通の主婦」にアピールするという面があった。つまり、田中らは主婦の現状を否定せず共感を示すことで多くの女性たちを議論に引き込み、その上で働いたほうが良いのではないかという方向に誘導したのだ。編集部「介入」が論争内の意見を完全に転覆させたわけでないにしろ、少なくとも「養われる存在」という主婦理解を広めた動きであったとはいえる。こうした主婦理解を読者がどう受け止めたかを明らかにすることは困難だが、田中らが同誌を「生き方雑誌」と位置づけていることからわかるように（『わいふ』編集部1993: 84-85）、同誌には論争等を通して読者の望ましい生き方が固まっていくという仕組みがある。したがって、この論争が、それまではさして問題意識をもっていなかった読者女性たちにとって、主婦という生き方を問う手掛かりにはなりえたと考えられる。

加えて、同誌のコミュニケーションにも注目すべき点がある。既存の主婦論争は概括的に言

えば「性別役割分業を肯定し、その中で主婦の権利を主張しようという立場」と「主婦労働無価値説に立って、女性の経済的自立の必要性を主張する立場」からなる論争だった（駒野 1982: 241）。それが同誌の主婦論争では「性別役割分業を肯定し、その中で主婦の権利を主張する／その中で主婦の自立を主張する」という論争枠組になっていた。契機となった投稿は主婦の経済力をテーマに「女性解放」にまで言及している「進んだ」内容だったにも関わらず、その投稿者でさえ「主婦が家庭の管理者としての役割を担う以上、完全な経済的独立は不要」と述べている。つまり、同誌の論争では投稿者それぞれの立場は大きく異なっているわけではなく、先鋭的に論を戦わせる構図だったわけでもない。そのため論戦ではなく会話のようなモードで極端な議論には組みしないう傾向がみられ、きっぱりと言い切ってしまうことでとりこぼされることを恐れ、苦心しているかのようなニュアンスのあるコミュニケーションが特徴的だった。

このように誌面からは、同誌は自由な言論が可能な言説空間という理想を掲げると同時に、意図的な「介入」を実行する側面も併せもつメディアであることがわかる。さらに、いかなる主張も全否定せずに考えることを促すというメディアのあり方が示されてもおり、それが議論などに縁のない「普通的主婦」をも巻き込み主婦によりそった議論につながった。つまり同誌のこうしたメディア性が女性たちの意識変革プロセスを可能にしたといえよう。

戦後日本社会に起こった「養われる存在」としての主婦に対する女性たちの意識の変化、つまり「養われる存在」から自立した近代的個人へという意識変革は、後に主婦の労働力化につながり、さらには家族の変化をもたらすといった大きな社会変動の契機ともなった。メディア上の主婦論争はこうしたプロセスを支えた要因のひとつといえる。もちろんマスメディアである商業女性雑誌の主婦論争と比較すれば、『わいふ』誌の規模は必ずしも大きくはなく、またその影響力を検証することもできないが、それでも同誌は大きな流れの一翼を担った、社会を変える力のひとつだったとはいえるだろう。

7 おわりに

『わいふ』の主婦論争は既存の主婦論争のようにクリアにはまとめられないが、その一方で、同誌の論争には論争を通して人生を考えさせるしくみがあり、同時にいわば「布教効果」といったものも期待できたようだ。「主婦の長電話」論争は、同誌編集部フェミニストによる議論のコントロールから考えても、時代に先駆けたフェミニズムの動きが一応の収まりを見せた70年代後半の、フェミニズムの思想を「布教」していくという時代の論争だったといえよう。『わいふ』第2期は30年にわたっており、今回取り上げた「主婦の長電話」論争から20数年後の2003年から2005年に最後の論争、第6次主婦論争が起こっている。これを今回同様に分析すれば主婦の考えがどう変化したかをみることが期待できるので今後の課題として検討したい。

[注]

- 1) 『わいふ / wife』は第1期と第2期は『わいふ』だったが、第3期には『wife』へと誌名が変更されたため、それぞれの期に対応して『わいふ』と『wife』を使い分け、全体を指す場合は『わいふ / wife』と表記する。また、同誌の投稿は「図表2の各投稿の記号、その投稿が掲載された同誌の発行年、号数、ページ数」の順に括弧内で示す。

- 2) 例えば齊藤（2008）は「女性雑誌クロワッサンやMORE等は、それぞれのやり方で読者に『自立＝伝統的な生き方の見直し』を促し、一定程度の啓蒙的な役割を果たした」（齊藤 2008: 172）と述べている。また、当時のフェミニズムに立脚したミニコミ誌としては、1972年創刊『女から女たちへ』、1972年創刊『あごら』、1975年創刊『行動する女』、1977年創刊『フェミニスト』等多数存在する（女とミニコミ研究プロジェクト編 1998）。
- 3) 第2期『わいふ』では同誌を会員に郵送しており、編集部から提示された資料によると1994年2月の一斉発送数は4053件でこれが最多である。
- 4) 同誌では、①「おしゃべり」は「皆さんの声の広場です。感想、提言、どうぞ何でもお寄せ下さい」、②「ティーチイン」は「発言と論争のページ」と説明されている。なお、「コーナー」の名称はときおり変更されているが、その内容や誌面上の位置づけはほぼ継承されており、この2つは当該論争があった当時の名称である。
- 5) 第2期『わいふ』発足時1976年には、第1期からの会員の半数約100人に加え、新規に勧誘した会員約450人、計550名で600部を印刷したといい（わいふ編集部編 1993: 73）、その10年後には会員3500人という記述がある（同：82）。「主婦の長電話論争」当時1977-1978年の会員数や発行部数は明らかではないが、発足から1、2年では3500人には及ばず、それでも500人以上はいたとみるのが妥当であろう。したがって投稿者も多く、全ての投稿を掲載することは不可能であり、取捨選択の上で掲載されなかった投稿は相当数あったと推測される。

[文献]

- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』 勁草書房.
- 池松玲子, 2017, 「主婦を問い始めた女性たち——田中喜美子および和田好子のライフヒストリー」『東京女子大学社会学年報』第5号, 19-35.
- 金井淑子, 2011, 『依存と自立の倫理——〈女／母〉の身体性から』 ナカニシヤ出版.
- 貴島操子, 1968, 「主婦と家庭と職業——主婦論争の流れ」田中寿美子編『現代教養文庫623 近代日本の女性像』社会思想社, 223-40.
- 駒野陽子, 1982, 「『主婦論争』再考——性別役割分業意識の克服のために」上野千鶴子編『主婦論争を読むⅡ 全記録』, 231-45.
- 国広陽子, 2001, 『主婦とジェンダー』尚学社.
- 女とミニコミ研究プロジェクト編, 1998, 『女性センターで読める女のミニコミ・リスト』女とミニコミ研究プロジェクト.
- 齊藤美奈子, 2008, 「フェミニズムが獲得したもの／獲得しそこなったもの」岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ③…80・90年代』紀伊國屋書店, 169-88.
- 上野千鶴子編, 1982a, 『主婦論争を読むⅠ 全記録』 勁草書房.
- 編, 1982b, 『主婦論争を読むⅡ 全記録』 勁草書房.
- わいふ編集部編, 1993, 『変わる主婦・変わらない主婦——投稿誌「わいふ」の描く女の30年』グループわいふ.

The Housewife in Contemporary Society: Analysis of a “Housewife Debate” in the Japanese Contribution Magazine *Waihu*

IKEMATSU, Reiko

Owing largely to the second wave of feminism that problematized the role of the housewife, many women whose life paths have restricted them to the familial sphere have experienced a certain form of self-consciousness related to their status in contemporary society. This trend has also been evident in post-war Japan. Indeed, the meaning of being a housewife has been actively debated in diverse media, including the contribution magazine “*Waihu* (Wife)”, which is the focus of this paper. The “housewife debates” in this magazine are particularly interesting because it was the housewives themselves—rather than high-profile opinion leaders—who shared their views; moreover, they did so from the perspectives of their ordinary lives. This paper examines how women’s feelings and thoughts about being a housewife in modern society were expressed in the earliest of these debates, which took place in the late 1970s, and demonstrates how this discourse followed a particular trajectory that set the tone for the waves of similar media debates that followed. The focal point of this debate was whether being a housewife made women “dependent” and unable to embody the modern ideal of a self-sufficient individual. Although some contributors argued that the concept of independence could be interpreted in different ways, the view that equated independence with earning power and economic self-reliance gradually predominated, and the debate became centered on the question of whether wives should work outside the home. The magazine’s policies, both overt and covert, seem to have reinforced this controversy. The editors, who also called themselves housewives, stated that they had no intention of criticizing women who lived as housewives and asked readers/contributors to try to embrace and think about differing positions rather than dismiss them. However, they also subtly led the debate in a certain direction, rendering readers/contributors susceptible to the view the editors sought to advance. Although *Waihu*’s readership has never been comparable to that of the large-scale media, it played an interesting role in the larger movement for profound social change that occurred during this period.

Keywords: housewife, modern individual, women’s magazine